

【研究ノート】

国際音楽考古学会 (ISGMA) 第6回シンポジウムと「音楽考古学」

—日本列島から出土した音響発生器具の考古学的研究の発表を通して—

荒山千恵

1. はじめに

2008年9月9日から9月13日の5日間、国際音楽考古学会 (International Study Group on Music Archaeology, 通称 ISGMA) 第6回シンポジウムがドイツ・ベルリンにある国立民族学博物館にて開催された (図1)¹。本稿は、筆者の発表内容を紹介するとともに、シンポジウムを通しての音楽考古学研究の位置付け、さらに筆者の発表の位置付けについて述べる。

2. 「音楽考古学」としての国際的な研究のはじまり

研究部会の名称にある「音楽考古学」(英: Music Archaeology, 独: Musikarchäologie) とは何か。まずは、この用語を研究グループの名称に用いる ISGMA とその前身である音楽考古学会 (The Study Group on Music Archaeology) の設立経緯について確認する²。

ISGMA の前身である音楽考古学会が結成されるきっかけは、1977年にバークレーにて開催された国際音楽学会 (International Musicological Society) の会議の1つに、「音楽と考古学」 (“Music and Archaeology”) と称するラウンドテーブルが設けられことにある。開催後の報告書によると、議長リチャード・クロッカー (Richard L. Crocker) のもと、7件の研究が報告されている (Crocker, Bayer, Hood, Boiles, Kilmer, Hickmann, Ming-Yueh, and Lund 1981:844-869)。各研究者は、それぞれ古代エジプト、古代メソポタミア、古代パレスチナ、中国新石器時代、ドンソン文化 (東南アジア初期の金属器文化)、コロンブス以前のメキシコ、先史スカンジナビアを対象に、音楽学的・考古学的研究をおこなっている。このラウンドテーブルが出発点となり、1981年にソウルで開催された国際伝統音楽学会 (ICTM³) において内部に学会が設立され、1983年に ICTM の正式な学会として認められた。その後も、世界各地において国際会議が催されるが、1996年にリマソルで開催された会議を期に、考古学者とのより接近した協同研究を進めるために ICTM から離れ、ISGMA (International Study Group on Music Archaeology) と改名し、再出発した。以後、ドイツを拠点に2年毎にシンポジウムが開催されており、第6回シンポジウム (2008年) はドイツ考古学研究所 (DAI) オリエン特部門⁴とベルリン国立民族学博物館民族音楽学部門⁵によって主催されている。

上述の主催機関からも明らかなように、ISGMA のシンポジウムには、音楽学、民族学

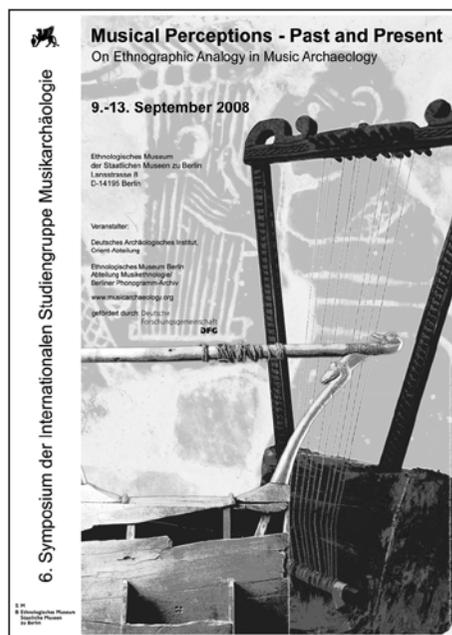


図1 第6回 ISGMA シンポジウムのポスター

(文化人類学)、考古学の研究者を中心に、音響学や図像学をはじめ、楽器製作者やミュージシャンを含む幅広い関連諸分野からの参加がある。過去の音文化を再構成するための資料には、民族誌料や文献史料による「記録資料」、口頭伝承などの「詩料」、民具・伝世品・考古資料による「物質資料」などがある。いずれの資料も人類文化における音と人との関わりを明らかにする上で重要である。中でも、発掘された音響発生器具⁶ (sound producing devices) や音楽的描写を表現する絵画・造形物の考古学的発見は、先史・古代の音文化を明らかにするための貴重な手掛かりである。ただし、道具を使用した当事者の行為や意識を直接観察できない考古資料による研究は、音響発生器具としての機能・用途の認定、型式学的分類と編年的検討、出土状況や遺跡の性格を通しての社会・文化的な検討など、課題も多い。その課題に着手するためには、音楽学の補助的アプローチとしての考古学ではなく、関連諸分野で問題を共有し、「音楽考古学」としての検討方法を築いてゆくことが必要である。世界各地の先史・古代の音文化を対象とした関連諸分野からの様々な研究に議論を重ねる国際シンポジウムの果たす役割は大きい⁷。

3. 過去の ISGMA シンポジウムに報告された日本列島から出土した音響発生器具の研究

これまで開催されてきた第5回までの ISGMA シンポジウムの議事録によると、郡司すみが日本列島出土の銅鐸を独語の論文により紹介している (Gunji 2000)。また、その前身である ICTM 音楽考古学会第3回大会の報告書では、柘植元一による日本列島出土の考古資料を対象とした石笛および土笛の論考、ディヴィッド・ヒューズによる日本の音楽考古学を時代別に紹介した論考が掲載されている (Tsuge 1988, Hughes 1988)。中でも、ヒューズによる論考は、縄文時代から古墳時代までの幅広い音響発生器具を音楽学・考古学双方の先行研究に基づいて紹介している。ヒューズによる網羅的な研究が報告されてから現在まで約20年が経つが、その間に日本の音響発生器具の出土事例も大きく増加した。当初は、音楽学研究者を中心に日本音楽の源流を明らかにする上で関心が寄せられてきたが、日本の考古学研究の中でも音響発生器具や音文化の問題が徐々に着目されるようになっていく。

▶ Finds-New and Revisited (発見—新たな発見と再考)
▶ Ethnomusicological and Ethnoarchaeological Implications in Music Archaeology: Approaches (音楽考古学における民族音楽学・民族考古学との関係: アプローチ)
▶ Ethnomusicological and Ethnoarchaeological Implications in Music Archaeology: Greek and Roman Antiquity (音楽考古学における民族音楽学・民族考古学との関係: 古代ギリシャとローマ)
▶ Ethnomusicological and Ethnoarchaeological Implications in Music Archaeology: Music and Spirituality (音楽考古学における民族音楽学・民族考古学との関係: 音楽と精神性)
☆ Music Archaeology and Historical Ethnomusicology Continuity and Discontinuity of Musical Traditions: Stringed Instruments (音楽考古学と歴史民族音楽学 音楽的伝統における連続と非連続: 絃楽器)
▶ Music Archaeology and Experimental Archaeology Construction and Reconstruction: Ancient China (音楽考古学と実験考古学 構成と再構成: 古代中国)
▶ Music Archaeology and Experimental Archaeology Construction and Reconstruction: Ancient Egypt (音楽考古学と実験考古学 構成と再構成: 古代エジプト)
▶ Music Archaeology and Experimental Archaeology Construction and Reconstruction: Prehistoric America (音楽考古学と実験考古学 構成と再構成: 先史アメリカ)
▶ Music Archaeology and Experimental Archaeology Construction and Reconstruction: Prehistoric Europe (音楽考古学と実験考古学 構成と再構成: 先史ヨーロッパ)
▶ Music Archaeology and the Media (音楽考古学とメディア)

表1 ISGMA 第6回シンポジウムにおける口頭発表テーマ (シンポジウムプログラムより抜粋)

4. ISGMA 第6回シンポジウムについて

今回開催された第6回シンポジウムは、「音楽的認知—現在と過去—音楽考古学における民族学的類推」(Musical Perceptions: Past and Present On Ethnographic Analogy in Music Archaeology)を大テーマに、口頭発表、ワークショップ、ポスター発表、コンサートが催された。口頭発表ではさらに4部構成によるテーマが設定された(表1)。筆者の発表は、表1の☆に示したテーマのもと、「日本の音響発生器具にみる継承性と非継承性：音楽考古学と歴史民族音楽学に基づいて」(Continuity and Discontinuity of Musical Instruments or Sound Producing Devices in Japan: Based on Music Archaeology and Historical Ethnomusicology)と題しておこなった(Arayama 2008)。

発表については、主に日本列島から出土した弥生・古墳文化に帰属する音響発生器具について取り上げた。当概期について記述された文献史料は少ないため、考古資料に認められる音響発生器具を対象とする研究は、奈良時代以降の文化制度化された音楽文化が形成される過程を明らかにする上で意義がある⁸。もちろん、今回取り上げられなかった弥生文化に先行する縄文文化においても音響発生器具を使用していたことは間違いないであろう。実際に、縄文文化に帰属する音響発生器具の出土が指摘される様々な遺物がある。ただし、それらの中には機能・用途の認定に疑問が寄せられるものも少なくない。通文化的にみた音響発生器具の利用を検討するためにも慎重な検討のもと今後の研究課題の1つと考えている。今回の発表では、文化制度化された日本の古代音楽文化が形成される過程に光を当て、列島に定型化した音響発生器具が一定の時空間的な幅をもって製作・使用されるようになった絃鳴系の「琴」・打鳴系の「鐸」に着目し、両者の展開の相違を考古学的に考察した。口頭発表では、図2に示す構成のもとにおこなっているが、次章では発表内容を和訳したものを加筆・改変して紹介する。

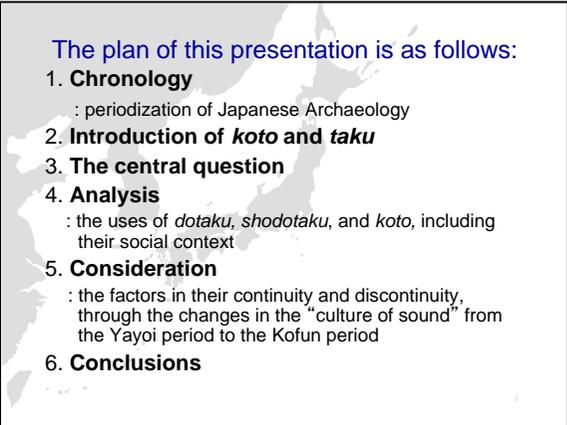
5. 日本列島から出土した音響発生器具による研究発表

5-1. 研究の目的

研究の目的は次の2点である。1つは、日本の原始・古代における音文化の解明に向けて、発掘された音響発生器具に基づく考古学的な再構成をおこなうこと、もう1つは、音楽考古学(「音」の考古学)および歴史民族音楽学を通して、日本の伝統的な音楽文化の形成過程を明らかにすることである。本発表では、日本古代音楽文化の形成過程にある弥生・古墳文化の絃鳴系および打鳴系の音響発生器具を取り上げ、それらの展開にみる継承性と非継承性について紹介する。

5-2. 論点—「琴」の継承性、「鐸」の非継承性

日本列島では、弥生・古墳文化における絃鳴系の「琴」が約100点発見されている。これらの「琴」は、長胴な琴板の片側端部に6本前後の突起を作り出し櫛歯状を呈する(図3)。出土「琴」の大



The plan of this presentation is as follows:

1. **Chronology**
: periodization of Japanese Archaeology
2. **Introduction of *koto* and *taku***
3. **The central question**
4. **Analysis**
: the uses of *dotaku*, *shodotaku*, and *koto*, including their social context
5. **Consideration**
: the factors in their continuity and discontinuity, through the changes in the "culture of sound" from the Yayoi period to the Kofun period
6. **Conclusions**

図2 発表内容の構成
(荒山 2008、シンポジウムに使用したパワーポイントより)



図3 弥生文化の「琴」
鳥取県青谷上寺地遺跡（弥生中期）
（鳥取県教育文化財団ほか 2002）



図4 正倉院宝物の檜和琴 奈良時代（奈良国立博物館 1997）

きさや共鳴槽の有無などの違いはあるが、端部が櫛歯状を呈する突起をもつ点は大半の出土「琴」に共通する特徴である。このような形態の特徴は、古墳文化における弾琴埴輪に表現された「琴」、さらに奈良時代における正倉院宝物として伝世された和琴（わごん）にも認めることができる（図4）。とくに、和琴は現在も日本伝統楽器の1つとして非日常的な場面において使用されており、弥生文化にみる「琴」の形態的特徴が約2000年を経た現在にも認められることになる。

一方、櫛歯状の「琴」が使用されるようになった弥生前期末～中期頃に、打鳴系である青銅製の「鐸」も製作・使用されるようになる。銅鐸や小銅鐸と呼ばれる考古資料がそれに該当する（図5, 6）。発音方法は、内部に吊り下げられた舌との接触によって打ち鳴らされる。弥生文化において、それまで列島に存在しなかった青銅製の音を発する「鐸」を受容し、製作・使用したことは、当時の人工的音響に対する認識に大きな変化を与えたものと推測される。ところが、弥生文化に出現した「鐸」は、ほぼ同じ時期に出現した櫛歯状の「琴」のように後続する文化へと継承されない。銅鐸は祭器として発達した後に弥生文化の内に終焉を迎え、音を鳴らして使用されたと推測される小銅鐸も、古墳前期を最後に終焉となる。

櫛歯状の「琴」および「鐸」は、ほぼ同じ時期に日本列島において製作・使用されるようになり、分布においても列島西南部を中心とする点で重複している。また、どちらの音響発音器具も祭儀的場面での使用が推測されている点も共通する。では、なぜ、その後の展開において両者に大きな違いが認められるのか。このような考古学的現象に認められる「琴」および「鐸」の相違について、日本列島における音文化の継承性・非継承性という観点から分析・考察する。



図5 銅鐸 兵庫県気比溝谷
高さ45.2cm（東京国立博物館
Image: TNM Image Archives）



図6 小銅鐸の出土事例
1 福岡県蒲志 弥生後期（常松 1985）
2 静岡県愛野向山II 弥生終末（松井 1989）
3 千葉県天神台 古墳前期（浅利 1983）

5-3. 分析—「琴」と「鐸」の性格

5-3-1. 「鐸」の非継承性

銅鐸は音響発生器具としてではなく祭器として発達した。その用途は、農耕祭祀に使用されていた可能性が推測されている。出土状況では埋納された状態で検出される事例が多く、墓の中に埋置する副葬品には用いられていない。このような出土状況は、銅鐸の取り扱いが特別であったことを示している。銅鐸の変遷について、佐原真は銅鐸の吊り手の変化に注目し、銅鐸が音響発生器具としての機能の衰退と併行して大型化・装飾過多へと変化していることを指摘し(佐原 1960)、田中琢はその変化を「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へ(田中 1970: 50)と表現した。銅鐸は弥生文化において祭器として発達した結果、ベルとして継承されることなく、古墳文化への大きな社会的変動を前に終焉を迎えたと考えられる。一方、小銅鐸には、銅鐸に類似した形態や装飾をもつもの(「銅鐸小型品」と呼ぶ)と、シンプルな形態をもつもの(「小型青銅製ベル」と呼ぶ)とがある。小銅鐸の多くは集落遺跡から発見されている。とくに、小型青銅製ベルの出土状況の中には墓に伴う出土事例が複数確認され、鐸身の内面や鈕に摩滅した痕跡が観察される例も認められることから、葬送を含めた集落内祭儀に音を鳴らして使用していたことが考えられる。しかしながら、その小型青銅製ベルさえも古墳前期を最後に終焉を迎える。音響発生器具として使用されていても、その位置付けはあくまで祭祀具であり、音楽的・樂器的な範疇へと応用されるには至らなかったことを示している(荒山 2008a, 2008b)。

5-3-2. 「琴」の継承性

弥生文化の「鐸」が後続する文化へと継承されなかったのに対し、「琴」は弥生文化から古墳文化への移行期に急増する。「琴」は木製であるため、主に低湿地遺跡に残存し、旧河川をはじめとする溝状遺構から破損した状態で発見されるものが大半である。その出土状況を通して「琴」の用途や性格を直接的に理解することは困難な場合が多いが、一部の出土事例においては古墳文化の祭祀遺構に伴い出土したもの、方墳の周溝に伴い発見されたものなど、首長層に関わる祭儀での使用を推測させる事例が確認されている。このような出土事例から推測される「琴」の所有と性格は、文献史料の『古事記』や『日本書紀』の記述において、「琴」が神託という特別な場面に用いられている点にも関係すると考えられる¹⁰。

5-4. 考察—弥生・古墳文化における音文化の変化

弥生文化に盛行した「鐸」は、古墳文化における新たな祭儀形態の確立に際し、音響発生器具として使用された小型青銅製ベルさえも古墳前期を最後に、終焉を迎えた。それに対し、「琴」は首長層の祭儀での使用が確立してゆくことが推測された。弥生文化における「琴」と「鐸」は、いずれも祭儀の場面で使用する音響発生器具と考えられてきたが、その性格は相違するものであり、使用場面も異なるものであったと考えられる。このことは、両者の出土する遺跡分布が重複していながら、「琴」と「鐸」を共に使用したことを推測させる出土事例が殆ど知られていない点にも合致する。

さらに、古墳中期頃には音響発生器具の位置づけにも新たな展開が認められるようになる。それは、弥生文化の段階では明確に認めることのできなかつた、他種の音響発生器具を同一場面で使用した可能性を示す事例についてである。例えば、栃木県鶏塚古墳の弾琴埴輪には、琴板の上に「鈴」を付けた表現がある(図 7)。装飾的に付けられていることも考えられるが、弥生文化に「琴」と「鐸」が同一場面で使用されたことが想定しがたい点とは違って、打鳴系と絃鳴系の音響発生器具が同時に使用されている点は注目される。さらに、主に古墳文化において使用された筑形木製品と呼ばれる絃鳴系音響発生器具の存在も重要である(図 8)。

木製品は、弥生文化に普及した天板をもつ「琴」の構造とは異なり、一木造りで棒状を呈し、その一端に櫛歯状の突起をもつ別種の絃鳴系音響発生器具であると考えられている（笠原 1999, 2000b, 2004, 荒山 2005 ほか）。この筑形木製品（図 8-1）と弥生文化より連続する「琴」（図 8-2）が、同一遺跡内で同じ帰属時期に出土する事例が複数確認されている。このことは、異なる種類の絃鳴系を「合奏」的に用いた可能性を示している。祭儀具としての限定された音響発生器具の範疇を越えて、それらを「合奏」的に使用することは、日本列島における「音楽」的な概念の形成を示唆する重要な現象であると考えられる（荒山 2008a）。

5-5. まとめ—分析・考察を通して

「琴」と「鐸」の変遷をとおして、それらの継承性・非継承性にみられる要因は、使用された社会的コンテクストと「音楽」的な概念の形成過程との関わりが深く関係している。

弥生文化に盛行した「鐸」については、後続する文化へと継承されないことを述べた。ただし、日本の音文化において打鳴系の音響発生器具が受け入れられなかったわけではない。古墳文化には新たに「鈴」が使用されるようになる。「鈴」は、古墳の副葬品として発見される鏡・馬具・帯金具などに複数付けられている例が多く、単に音を発するためだけではなく、それらの装飾性や宝器性を高めているように見受けられる。また、奈良時代には仏教伝来に伴い「釣鐘」が使用されるようになる。日本列島において系統の異なる打鳴系音響発生器具の受容と展開が重ねられてきたことは、現在の日本における「鈴」や「鐘」の多様性にも影響している。

一方、櫛歯状の突起を特徴とする「琴」の系譜は、限定された使用のもとに継承されてきた。ここで注意したいのは、我々が一般的に「琴」と呼び音色を耳にしているのは、13 絃を張った箏（そう）と呼ばれる「琴」であり、和琴とは異なることである。箏は、近年の学校での音楽教育に使用されるなど比較的身近な和楽器として知られている。しかし、本稿で取り上げてきた櫛歯状の突起を特徴とする和琴は、現在においても日常的な楽器として奏でられるものではない。皇室をはじめ特別の伝統儀式を継承している神社で行われる御神楽（みかぐら）などに使用されている¹¹。

このような限定的で特別な楽器として体系化された音楽文化の中にあっただからこそ、2000 年



図7 琴板に鈴を付けた表現のみられる
栃木県鷲塚古墳の弾琴埴輪（東京国立
博物館 Image: TNM Image Archives）

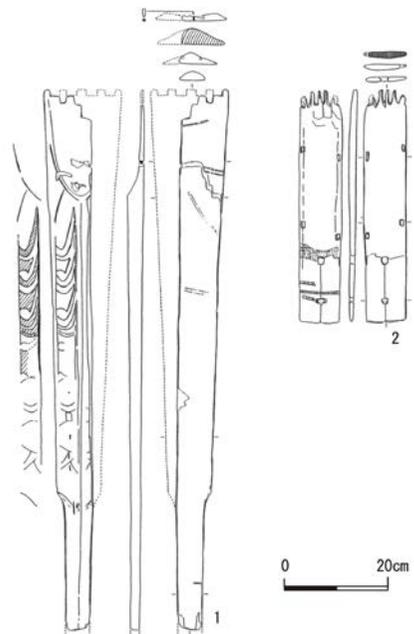


図8 静岡県恒武西浦遺跡から出土した古
墳中期の「筑形木製品」(1)と「琴」(2)
(静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000)

前の「琴」の特徴を引き継いだ和琴の伝統が現在に至っているといえよう。

6. シンポジウムにおける本研究の位置づけ

本章では、筆者の発表後に寄せられた質疑およびコメントを取り上げ、シンポジウムを通しての本研究の位置づけを確認し、まとめにかえたい。

発表後に寄せられた質疑・コメントは、表2に示したとおりである。その内容から、第一に、音響発生器具の機能・使用方法、音響・音階の有無についての関心が高いこと、第二に、アジア大陸の東端に位置する日本の原始・古代における音文化について、古代中国と比較する観点から関心もたれていることが挙げられる。

第一に挙げた関心は、シンポジウムの研究動向にも一致する。世界各地の音楽考古学研究の発表のうち、半数近い研究が「音楽考古学と実験考古学」にかかわる報告であった。発掘された音響発生器具や壁画・絵画・模造品に表現された楽器について、製作技術や製作工程、使用方法とその技術、音響および音階構成を検討するための復元的実験、さらに復元品を使用した演奏が積極的におこなわれている。シンポジウム期間中に催されたコンサートでは、考古資料にみる楽器を復元したレプリカを用いて実演もおこなわれ、製作・使用・音響実験による実践的成果を提示するものであった。音文化を再構成するための考古学的アプローチにおいて、分類や編年の整理、出土状況や遺跡の性格による検討とともに、音に対する認識や音響発生器具の使用方法を、単なる類推ではなく実験考古学的研究によって、より実証的に考察することも重要である。日本では、類例の増加とともに音響発生器具の分類や出土資料の個別検討において製作技術の考察がおこなわれているが、使用方法や音響に関する研究はまだ少ない。その理由として、音色や音階を問題とする以前に、考古資料における音響発生器具の認定問題や、絃の残存例が無いなどの有機質遺物の残存度の問題がある。しかし、櫛歯状の端部をもつ「琴」のように、絃の残存しない破損した木製の部材であっても、弾琴埴輪や土製模造品、伝世品など、実資料に失われた情報を補う別資料から復元的な推定が可能な場合もある。製作技術や形態的な復元と共に、使用方法や音響に考慮した研究に着手してゆくことも音文化を解明する今後の研究課題として必要である。音楽考古学における実験考古学的アプローチは考古学だけで達成されるものではなく、民族音楽学・楽器学・音響学をはじめとする関連諸分野との学際的研究が求められる。

第二に、古代中国の音響発生器具の様相を含めた視点からの関心についてである。弥生文化並行期の古代中国には、様々な音響発生器具の種類が存在するだけでなく、編鐘のように複数の鐘を並べることで音階をつくるもの、1つの鐘の打ち鳴らす位置によって2つの音程をもつものなど、音程や音階に対する規律の発達した音響発生器具が使用されていた。筆者発表の翌日に報告されたFang Jianjunの発表では、中国の山東省羅庄にある漢朝初期の大規模な墓¹²に近接して出土した石磬(chime stones)および鐘(bells)について、音階・チューニング・周波数に関する音響実験をおこない、その成果を報告している(Jianjun 2008)。筆者の発表内容は日本列島内における音響発生器具の考古学的現象を紹介したものであったが、大陸由来と考えられている日本の音響発生器具の紹介を通して、当該期における古代中国とアジア大陸の東

- 出土「琴」に想定される絃と突起の結縛方法、
痕跡の有無、痕跡の確認方法
- 使用方法、発音方法(奏法)
- 出土「琴」における規模の多様性
- 中国と日本の「琴」における出土状況(遺構)
の相違点
- 銅鐸の大型化・装飾過多の変遷と「舌」の有無
- 銅鐸や小銅鐸の音色への関心、音階の有無
- 古代中国のベルとの比較

表2 発表後の主な質問・コメントの内容

端に位置する日本列島との音文化の様相には、音響発生器具における機能・用途の相違、音階や合奏などの体系化された音楽文化の形成時期の相違があることを、改めて認識する機会となった。

人類史における音の文化制度化過程の一研究として、日本列島における弥生・古墳文化の音響発生器具を対象とした考古学的研究を紹介できたこと、さらに当該期における古代中国の音文化の諸相を含め、アジア大陸の東端に位置する日本列島として音文化を概観することに関心がもたれたことは、本シンポジウムで発表したことの成果であったと考えている。人類文化における音と人との関わりについて、関連諸分野と共に問題や検討方法を共有しながら、今後も研究をすすめてゆきたい。

謝辞 本稿執筆ならびに ISGMA シンポジウムでの発表にあたり、北海道大学大学院文学研究科の津曲敏郎先生、小杉康先生、佐々木亨先生、加藤博文先生、同研究科北方文化論講座のラファエル・アバ氏、赤井文人氏、山田祥子氏に大変お世話になりました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

付記 ISGMA シンポジウムに発表した研究は、筆者に交付された平成 18 年度財団法人北海道大学クラーク記念財団研究助成、平成 18 年度高梨学術奨励基金研究助成、平成 19 年度笹川科学研究助成による成果の一部である。

註

- 1 図 1 に示すポスターは、<http://www.dainst.de/medien/de/POSTER-ISGMA-2008.pdf> より掲載した。
- 2 ISGMA の設立経緯については、Ellen Hickmann 2000、および ISGMA のホームページ [<http://www.musicarchaeology.org/index.php>] を参照のもと記載した。
- 3 International Council for Traditional Music の略である。
- 4 正式名称は、Deutsches Archäologisches Institut (DAI), Orient-Abteilung である。
- 5 正式名称は、Ethnologisches Museum Berlin, SMB SPK, Abteilung Musikethnologie, Medien-Technik und Berliner Phonogramm- Archiv である。
- 6 音響発生器具という呼称は、「音」を発するための道具を指して使用している。一般的には「楽器」という呼称を広義に捉えて使用することもできるが、我々の概念として「音楽」を奏するための道具という認識を持ち合わせやすい。そのため、「楽器」よりも客観的かつ包括的な機能を指す用語として「音響発生器具」の呼称を用い、「音楽」を奏する道具を指す場合には「楽器」と呼んで区別する。
- 7 2001 年、ICTM に音楽考古学会が再編されることとなり、新たに Music Archaeology Study Group (MASTG)が編成され、会議がおこなわれている。
- 8 文化制度化された音楽文化とは、文化的規範によって歴史的に達成された音文化のことをいっている。本稿では、「音文化」と「音楽文化」という表現を用いている。前者は人類文化における音とヒトとの関わりを示す包括的な呼称を指して用いているのに対し、「音楽文化」は上述のとおり、文化制度化された音文化を指して使用している。文化制度化の呼称について、小杉康は「性向、性向に基づく行為、行為によって生じる効果、これらを一定の方式に従い秩序立てることを、＜文化制度化＞あるいは＜制度化＞と呼ぶことにする」(小杉 1988 : 108) としている。また、矢野暢は論考「制度としての音楽」において、「制度化」を「秩序化」・「規範化」・「意味性の付与」という三要素によって捉えている(矢野 1988 : 304-319)。
- 9 図 5 および図 8 に掲載する考古資料の写真是、東京国立博物館 Image: TNM Image Archives, Source: <http://TnmArchives.jp/> により掲載した。
- 10 記紀における「琴」の記述については、荻美津夫 2005 や森山宗保 2007 などの論考がある。
- 11 現在の「和琴」の使用については、『図説日本の楽器』(吉川 1992:16-17) を参照した。
- 12 Jianjun の発表要旨に、その墓の時期について、ca.187-180B.C.とある。

引用・参考文献

浅利幸一

1983 「千葉県市原市天神台遺跡遺跡出土の小型銅鐸」『考古学雑誌』日本考古学会 68-3, 85-90 頁

荒山千恵

- 2005 「筑形木製品の研究」『研究論集』北海道大学大学院文学研究科, 5, 99-121 頁
- 2006 「埴形土製品の研究—考古資料における音響発生器具の機能・用途の検討」『研究論集』, 6, 1-22 頁
- 2007 「篋形木製品について」『北海道考古学』北海道考古学会, 43, 97-112 頁
- 2008a 「人類史における「音」の文化の考古学的研究—日本列島から出土した音響発生器具を対象として—」平成19年度博士論文, 北海道大学大学院文学研究科
- 2008b 「人類史における「音」の文化制度化の研究—日本列島から出土した音響発生器具の考古学的検討を例にして—」『北海道民族学』4, 44-52 頁

荻美津夫

- 2005 『古代音楽の世界』高志書院

笠原 潔

- 1995・1996・1999・2000a 「出土琴の研究」(1)~(4)『放送大学研究年報』12・13・16・17, 95-112 頁, 127-139 頁, 177-194 頁, 85-105 頁
- 2000b 「第6章 考察 第1節 溝咋遺跡出土の筑状弦楽器について」『溝咋遺跡(その1・2)』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集, 417-425 頁
- 2004 『埋もれた楽器』春秋社

吉川英史(監)

- 1992 『図説日本の楽器』東京書籍

小杉 康

- 1988 「縄文時代の時期区分と縄文文化のダイナミクス」『駿台史学』駿台史学会, 73, 99-124 頁

佐原 真

- 1960 「銅鐸の鑄造」『世界考古学体系』日本II, 平凡社, 2, 92-104 頁

佐原 真・春成秀爾(国立歴史民俗博物館)編

- 1995 『銅鐸の美』毎日新聞社

静岡県埋蔵文化財調査研究所編

- 2000 『恒武西宮・西浦遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第120集

田中 琢

- 1970 「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』近畿 角川書店, 5, 44-59 頁

常松幹雄

- 1995 「小銅鐸の分布とその背景—小銅鐸の史的 position をめぐって」『古代探叢』II, 滝口宏先生古希記念論文習刊行委員会, 早稲田大学出版部, 153-171 頁

東京国立博物館編

- 2001 『館図版目録：弥生遺物篇(金属器)』増補改訂, 東京国立博物館
(財)鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター

- 2002 『青谷上寺地遺跡4』鳥取県文化財団調査報告書74

奈良国立博物館編

- 1997 『正倉院展』奈良国立博物館

春成秀爾

- 1987 「銅鐸のまつり」『国立歴史民俗博物館研究報告』国立歴史民俗博物館, 12, 1-38 頁
- 2004 「日本の青銅器文化と東アジア」『国立歴史民俗博物館研究報告』119, 31-49 頁

松井一明

1989 「静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』日本考古学会, 75-2, 58-72 頁

水野正好

1977 「埴輪の世界」『日本原始美術体系』講談社, 3, 172-187 頁

森山宗保

2007 「琴と祭祀」『近江文化財論叢』近江文化財刊行会, 2, 29-34 頁

矢野 暢

1988 「制度としての音楽」『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽』岩波書店, 2, 303-329 頁

ARAYAMA, Chie

2008 Continuity and Discontinuity of Musical Instruments or Sound Producing Devices in Japan: Based on Music Archaeology and Historical Ethnomusicology. Program and Abstracts of the Papers presented at the 6th Symposium of the *International Study Group on Music Archaeology*, p.7.

Crocker, Richard L., Ellen Hickmann, Anne Draffkorn Kilmer, Bathja Bayer, Liang Ming-Yüeh, Mantle Hood, Charles Lafayette Boilès, and Cajsja Lund

1981 Music and Archaeology, in: Daniel Hertz and Bonnie Wade(eds.), Report of the Twelfth Congress Berkeley 1977, Barenreiter Kassel · Basel · London, The American Musicological society, pp.844-869.

GUNJI, Sumi

2000 Dotaku, in: E. Hickmann and R.Eichmann(eds.), Studien zur Musikarchäologie II, Orient-Archäologie Band 7, Rahden/Westf. pp.27-34.

HICKMANN, Ellen

2000 Music Archaeology — an Introduction, in: E. Hickmann/R.Eichmann, Studien zur Musikarchäologie I, Orient-Archäologie Band 6, Rahden/Westf. pp.1-3.

HUGHES, David W.

1988 Music Archaeology of Japan: data and interpretation. The Achaeology of Early Music Cultures, Third International Meeting of ICTM Study Group on Music Archaeology, Verlag für systematische Musikwissenschaft GmbH, Bonn, pp.55-87.

JIANJUN, Fang

2008 Acale, Tuning, and Spectrum of early Han Dynasty (ca.187-180B.C.): Chime Stones and Bells Excavated at Luozhuang, China. Program and Abstracts of the Papers presented at the 6th Symposium of the *International Study Group on Music Archaeology*, p.16.

(あらやま・ちえ／北海道大学大学院文学研究科 専門研究員)